

氏名(生年月日)	仁 科 文 男
本 籍	ニ シナ フミ オ
学位の種類	医学博士
学位授与の番号	乙第 361号
学位授与の日付	昭和53年 3月16日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当(博士の学位論文提出者)
学位論文題目	X線像からみた腰椎分離症・分離すべり症の研究 一統計および主として第5腰椎分離すべり症の検討一
論文審査委員	(主査) 教授 森崎 直木 (副査) 教授 田崎 莚生, 教授 広沢弘七郎

論 文 内 容 の 要 旨

研究目的

脊椎分離症の発生原因, さらに脊椎分離症から脊椎すべり症に移行するメカニズムについて, いまだ確立された報告はなされていない。

そこで, 本症の多数例について, その初診時のX線検査所見をもとに, 年齢や, すべりの程度を比較検討して, 本症の全体としての経過と推移を解明する事を目的とした。

研究方法

1955年より1977年までに, 東京女子医大病院整形外科を訪れた本症の患者680例のうち, 15歳以下の例, および初診時すでに腰椎固定術等をうけている手術例を除外した644例を対象として, その初診時の腰椎X線フィルムについて, 下記の項目を調査して, その相関等を比較した。

1. 性・年齢
2. 部位および種類
3. 奇形の合併
4. 各種測定成績 (Lumbar Index, 仙椎傾斜角, 仙椎後屈モメント, すべり度, 不安定性)

研究結果

1. 本症は約2対1で男性に多い。また, 高年齢層, すべり症の割合が多い。
2. 第5腰椎の本症が, 男女共, 約80%を占める。
3. すべり症の頻度は, 第5腰椎では女性が高く, 第4腰椎では男性が圧倒的に高い。

4. 上部腰椎(第1, 第2, 第3腰椎)の本症は13%で, 全て分離症である。その約80%が片側例で, 分離面の形態も第4, 第5腰椎のそれと異なる。

5. 脊椎破裂の合併は, 第5腰椎の本症で24%と高かった。

6. 第5腰椎が台形を呈する頻度は, 第5腰椎の本症に高く, 特にすべり症では, 3/4にみられた。

7. 仙椎傾斜角(第5腰椎の本症のみ測定)は, 分離症平均42°, すべり症平均44°と余り差はなかつた。

8. すべり度の平均は, 第4腰椎すべり症で19%, 第5腰椎すべり症は14%で, 特に第4腰椎すべり症の女性で大きい。また, 第5腰椎すべり症では, すべり度は高年齢層大きい。

9. 第5腰椎すべり症における各測定値の相関をみると, そのすべり度と, Lumbar Index, 仙椎傾斜角, 仙椎後屈モメント等とは, はつきりした相関はみられない。

結論

1. 上部腰椎の本症は, 通常みられる第4, 第5腰椎のものとは発生的に異なるものと考えられる。

2. 第4腰椎の本症と, 第5腰椎のものについて, かなり, はつきりした相違点があり, 椎体の傾斜だけから, すべりのメカニズムを説明できない。

3. 成人になつてからも, 分離症からすべり症に移行するものや, すべり度が増大するものがある。

4. 本症にみられる最終腰椎の台形化は, すべり症の結果というより, むしろその原因と思われる。

論文審査の要旨

本論文は、多数の腰椎分離・すべり症患者のX線像を分析して、本症の成因に関する新しい見解を明かにしたもので、学術上価値あるものと認められた

主論文公表誌

X線像からみた腰椎分離症・分離すべり症の研究
—統計および主として第5腰椎分離すべり症の検討—
東京女子医科大学雑誌 第49巻 第1号 22～
38頁（昭和54年1月25日発行）

副論文公表誌

- 1) Scoliosis in Congenital Heart Disease
(先天性心疾患における脊柱側弯症)
Bulletin of the Heart Institute, Japan p.53～
59 (1964)
- 2) 脊髄症状を呈した Os odontoideum について.
- 3) 環・軸椎部変異の種々相.
東北整災外科紀 9 (2) 280～282 (1966)
- 4) 妊娠と手根管症候群に関する知見.
整形外科 26 (13) 1259～1261 (昭和50年11月)
- 5) Photon absorptiometry による四肢腫脹の数量化
に関する研究.
整形外科 29 (6) 493～496 (昭和53年6月)
- 6) 腰部脊髄神経根症状に対するカロマイドの硬膜外
注入療法について.
診療と新薬 8 (13) 191～192 (昭和46年12月)